

## Adrian Harley の 価 値

下 村 靖 子

*The Ordeal of Richard Feverel* の主題は Raynham Abbey に住む準男爵階級一族を中心としたヴィクトリア朝小説の典型である。そこでこの作品に対して少々筋の進行に又人物の態度に承服し難いところが多くて時代のずれを感じることもあるけれども、この小説がヴィクトリア朝のみでなく時代を超えて人間の心奥を探知したものであることを思う時 Meredith の鋭い透視力による人間心理の分析の努力のあとが今日の我々に強く訴えてくるのである。

俗に小説は作家が自己を客観化することができなければ書けないといわれているが、人間として生きている以上作品中に作家が没我できなかったところが残っていることは否めない事実であり、又その醇化されない味に我々の方では魅せられる。

この小説は Meredith の結婚生活の破綻の後に書かれたものであるから辛酸をなめさせられた「女性」に対して当時の小説として異常なくらい毒舌を振っている。他方彼は自分の視野を更に広げて男性女性を問わずヴィクトリア朝の人間をぐるりと見下ろし批評を下している。それは Shakespeare が悲劇の構成において深刻な場面のあとにその悲壯感をとり除くために副人物によって 第三者としての見解を語らせているように Meredith も Abbey の人々の上にあぐらをかいて悦に入っている 一言居士 Adrian Harley によって Raynham やその外界の人々の裏面をのぞかせるのに役かわせている。

Adrian は主人公 Richard のいとこであり、僧職に入るのを中途でやめて Raynham Abbey の居候となり、傍ら Richard の家庭教師として Sir Austin に仕えている。こういった境遇であるからおのずから彼は両者との間に微妙な立場として在り、その場の事情でくるくる態度をかえ決して人の機嫌を損じない人生哲学にたけた “The Wise Youth” である<sup>1)</sup>。Sir Austin の教育法をめぐる賛否両論ある情勢の中で主人に全面的に協力するのでもなく、又その反対にまわるのでもない。両者の間をうまく中和してたち回り、又両者に対して平等にずばりと一言皮肉をいういたずら小鬼である。人々の動きを傍観しながら見定めて一人落着きはらって折々に金言めいた当を得た言葉で相手を戯画的に表現する小鬼である。

自分のエゴイズムの所産である教育法に則って息子を教育しようとする Sir Austin の下で Richard の教育の一端を担いながら Adrian はその教育法が人間の本能を無視したものであることを思ひひそかに Sir Austin を嘲笑する Richard が 14 才の誕生日に Ripton と遠出をして Sir Austin に一大打撃を与え、その夜 Sir Austin は夜、邸内を一

1) cf. p. 31.

人で監視して歩くがそれを枕辺できいている Adrian の描写に Meredith は激烈にその矛盾を皮肉り、更にそれを通して形式に拘泥し、疾病に陥った社会の病因を探究している。そして Adrian にいわせればすべて経験によって解決されるべきだと Richard の教育に対して楽天的である。

彼は Sir Austin のエゴイズムばかりでなく Richard の方も同様に類にのせている。遠出事件に付随して起った放火事件の犯人として捕われた Tom を男らしい義侠心から Ripon と二人で脱走させようと計画している Richard の様子を見て見ぬふりをして、こっそり成行きを見守りながらもその行為が結局は法的には無効であることを知っている者としてばかりしいけども将来の良い教訓となることを認めた上で介入せず二人を猿芝居に見立てて見物している。

**"Boys are like monkys,"... "the gravest actors of farcial nonsense that the world possesses. May I never be where there are no boys! A couple of boys left to themselves will furnish richer fun than any troop of trained comedians. No: no Art arrives at the artlessness of Nature in matters of Comedy. You can't simulate the Ape. Your antics are dull. They haven't the charming in consequence of the natural animal...."** (p. 79)

Adrian にとって一般の喜劇に登場する道化よりもこの少年達の方がよっぽどおもしろいのである。つまり自分では大まじめに行なっているつもりでも、それが第三者に実にくだらないものであるのに、そういうことに気がつかない愚かさをおもしろがってそこに喜劇を見出している。先の Bedlam 見立ての社会だって、真剣に毒氣にあたため社会をつくらうと不可能なのに奔走する人々の中に愚を見抜き、かえってその人たちに排斥された Bedlam という世界を正気とする矛盾らしくて矛盾しない真相、この見地に彼の笑いの世界がある。

更に Adrian は Richard が階級を隔てた娘 Lucy と墮落した先をかぎつけて Berry 叔母さんと対面し、情の篤い彼女の表情と言葉からすべてを悟り、激昂することもなく、あっさりと "Wedding Cake" の分け前をもらってひきあげる。

**"So dies the System."... "And now let prophets roar! He dies respectably in a marriage-bed, which is more than I should have foretold of the Monster. ...."** (p. 367)

と彼はばかけた教育法のもたらしたこの結果は彼の予想通りに "system" の敗北に帰したことを述べている。しかしそうかといって恋を結実させた Richard のセンチメンタリズムに讃歌を送るわけでもない。Adrian の結婚観というのは甘い愛情の結合という点だけでなくもっと重大なことを見出している。つまり結婚は法によって成立する事実でなくその瞬間に人類の繁栄という未来に対する責任が起る。道にはずれた結婚は法が認可して

1) cf. p. 64~65.

も未来に必ずその弊害を残す。だから彼にとって本来は祝福しながら味わうべき “Wedding-Cake” までが “a Wedding-Cake is evidently the most highly civilized of Cakes and partakes of the evils as well as the advantages of Civilization!” (p. 371) に見えてくるのであろう。こういう立場から Adrian は身分ちがいの娘と秘密結婚したということについて非難を浴びせる人々の中であって、一人冷静な態度で Richard の結婚の問題点を見出している。Richard が囲われた世界に生い立ってその中で狭い女性観しかもたずに愛情の赴くままに性急に見境もなく結婚してしまい中庸の道を考えなかったことを愚かであると軽べつしている<sup>1)</sup>。しかしこの知者は Raynham Abbey に対してのみ眼をむけているのではなく、広く貴族社会をも見渡し、ここも調子が狂っているといっている。彼は lord と farmer を同列に並べてそのちがいを見出し lord は単に “vantage” (money) をもっているがために身分保持をしているのだと認め、貴族がその本来の存在価値を失い虚構の対象を崇めるまでに墮落してしまった社会をつぶさに解剖し、神話の極悪時代である「鉄の時代」の再来であるといい表面上は国家愛を表わす人々の心に祟拝の念のない、うわべばかりの時代が、Adrian にはかつての神々のように社会にあいそをつかし、愚者にはこのバランスのとれた社会がよいのだとまわりくどい逆説を使っている<sup>2)</sup>。

Adrian はこうした個人や社会の傍観と同様己自身をも客観視し傍観者の分限を守っている。

.....he remained tranquil on his solid unambitious ground, fitting his morality to the laws, his conscience to his morality, his comfort to his conscience. (p. 368)

は立派に見える反面、他人からみると「ずるい」と思えるところがある。親の許さぬ結婚を憤る Sir Austin の和解の日まで Richard を London に待機させ、且つ人生の裏街道をのぞかせようと計画しても、自ら先頭に立ってそういうところへ導きはせず Peter にその役をたのむ<sup>3)</sup>。又この計画にはまって Richard が Bella との交際に夢中になり、その評判が Mrs. Berry や Lady Blandish に伝わって今度はこの二人の要請で Richard をいさめに行き、自分もこの交際のきっかけをつくった一人としてやめなさいともいえず、不幸な女性を救済する目的の Richard の情熱にひきこまれて、次のようにいう――

“...Reform her, of course. The task is worthy of your energies. But, if you are appointed to do it, don't do it publicly, and don't attempt it just now.... (p. 481)

世間的には不道德な行ないを蔭で進言しながら自分は手を出さず Lucy にもこのことを知らせない。このような行状を認めたことは、前の貴族社会の批判にあるように、その社会自体が腐敗しているのに、美しい外面を装う必要はないといっているのかもしれないが

1) cf. p. 377.

2) cf. p. 420.

3) cf. p. 35.

女性の矯正を志す若者にこっそりやれというのは、実は男らしくない人間で言行不一致であると思えない。というのは傍観者としてはいた声明だって相手に面と向っていわれた言葉でない。正に彼の傍観は世渡り上手の術であると思えない。

このように彼は彼の言によってすぐさま Sir Austin や Richard の態度を変えるわけでもなく、事件の局面は彼とは無関係であって、単に一人で口を動かしているにすぎない。一方この気のきいた一言居士は Sir Austin と Richard がそれぞれエゴイズムとセンチメンタリズムにこもっている間げきにおいて、両者の判決を下す役としては生々と活躍するけれども、小説の後半、両者が相寄り最後に父親の教育法が敗北に帰す時には光がうすらいでしまう。

だから全体として Adrian を見ると Meredith の人物描写は竜頭蛇尾に終わってしまった感じがするが、これは傍観者の必然の運命かもしれないのであって、彼の役目は父のエゴイズムと息子のセンチメンタリズムの対抗するところに焦点があると思う。このような点から再考してみると、他人を笑い社会を笑いそして自分にも笑いを見出すこの知者の笑い、

When one has attained that felicitous point of wisdom from which one sees all mankind to be fools, the diminutive objects may make what new moves they please, one does not marvel at them: their sedateness is as comical as their frolic, and their frenzies more comical still. (p. 367)

は後年 Meredith が独自の観点から古今の喜劇を論述した「喜劇論」の satire, irony, humour を統率して上に立つ Comic Spirit

(whenever they (men) wax out of proportion, .... it (a Spirit) sees them self-deceived or hoodwinked, given to run riot in idolatries, .... whenever they offend sound reason, fair justice.... the Spirit overhead will look humanely malign and cast an oblique light on them, fallowed by valleys of silvery laughter. (p.89-90)

の片鱗が Adrian の大言壮語にそして傍観して笑う、そのいじわるさに見かけられると思う。そして彼の空に放つような言葉も喜劇精神中の “a harmless wine” (p. 93) と解せば力を失うことなく、彼の存在理由を示すことになり、父子の間で愚を発見している大事な人間となる。鋭敏な知恵で知者を標榜する父親をも愚であると看破し、又表面上繁栄をきわめる貴族社会の欠陥をつくこの存在は、後年の Meredith の Comic Spirit の内容の外枠が鮮明でないけれども表われているように思われて、作家の成長、精進をたどる拠点としての価値があるように感じられる。そして更に Adrian の個性ある言葉に具現された Meredith の先見の明にみちた洞察——偶像崇拝と化した国家愛にみられる如き、又良俗を装う System の敗北という小説の組立てに見られる如き——はこの小説が anachronism に墮することなく存続してきた所以として作家の時代精神を知ることができることに価値を有していると思う。